

「広報紙」は、やっぱり人と人とのつながりで
作られているんだなあということを強く感じました。
体当たりの取材はすごく緊張したけれど、
でも、とっても楽しかった。
世間話をはさみながら、だんだんと打ち解けていき、
次第に掘り下げた話になっていく…
その人の物語が形となって残ってゆく…
実際に経験してみないと
分からないすごさでした。 中村美王



熱心な取材がうれしかった

気田一良さん(下泉)

中村美王さんの熱心な姿勢が何よりうれしかった。石ころアートは自分の励みになる趣味。ずっと続けていきたいと思っています。どんな紙面ができていくのか、ちょっと恥ずかしいけれど、今から楽しみ。一生懸命取材してくれてありがとう。※美王さんが取材・編集した気田一良さんの記事は、来月号に掲載する予定です。

「まだまだ私は積極性が足りません。取材も記事も、上手にこなせなくて。卒業までに、いろんなスキルを磨いていきたいと思っています。もちろん緊張もしたけれど、それ以上に楽しくて。貴重な経験になりました。」
終了後、広報担当者^と握手を交わし、とびきりの笑顔を見せた。



写真上／体当たりのインタビュー。その距離感に必死さがにじみ出る中／石ころアートに挑戦。実体験が記事に深みを増す 下／役場に戻り編集。次第に笑顔も消えていった…。

インターンシップ制度とは…大学生などが一定期間企業や官公庁などで研修生として就業を体験する制度。

取材された経験から興味を持つ

愛知学院大学文学部日本文学科に通う中村美王さん20歳。このほどインターンシップ制度を活用して本町役場を訪れ、広報かわねほんちようの取材・編集を体験した。

子どもの頃から国語の授業や本を読むのが大好きだったという美王さん。広報を志望した理由について次のように話してくれた。

「小さい頃、コンクールで賞を取ったことがあって、広報担当の人が取材に来てくれたんです。その時すごくうれしくて。面白そうな仕事だなあと興味を持ち始めました。自宅では、おばあちゃんがよく広報紙を読んでいたんですが、それからはたまに私も読むようになったんですよ。普段読んでいた広

報紙って、どのように作られているのか、取材ってどんなものか…。なかなか見ることができない仕事の裏側を見てみたいと思って志望したんです。」
昼過ぎから始まった職場体験。まず最初に、広報という仕事について担当者から説明を少々。美王さんは、少し緊張しながら必死で耳を傾けた。1そもそも広報とは何か2伝えるための方法とは3取材の重要性—などの説明を受けながら、大事な部分はすかさずメモを取るあたり、既に広報担当者になりきっているようだ。

取材・編集通して5時間の作業

この日取材したのは、石ころアートを製作する下泉区の気田一良さん。自宅に伺い、一良さん本人から製作秘話、苦労話、作る喜び、今後の展望など約2時間の話を聞き、体当たりの取材を体験した。その途中では、美王さん自身が作品づくりに挑戦。実際に「やってみる」ことで、作業の細かさや難しさを実感した。

「目の部分がうまく描けないんですよ…」と言いながら、恐る恐る筆を走らせる美王さん。その様子を、一良さんが楽しそうに見つめていた。

取材を終え、役場に戻る。ここからが最も大変な作業だ。メモ帳に書きなぐった内容をパソコンに打ち込み、そこから文章を並べ替えたり、余分な言葉を削ったり。箇条書きを文章化した。悪戦苦闘しながら、パソコンに向かう美王さんの額に汗がにじむ。担当者が「休憩しよう」と投げかけても「大丈夫です」と言い、頑として机から離れない。その背中から、何事にも熱心に取り組みうとする姿勢とやり遂げようとする強い意志が感じられた。

四苦八苦しながら編集した記事ができあがったのは夕方遅く。撮影した写真から紙面にふさわしいものを選び、広報紙編集ソフトに記事と写真を組み込んで「仮の紙面」が完成した。記事の書き始めから約3時間。取材にかけた2時間と合わせて、実に5時間に及ぶ作業の末、ようやく一つの記事が完成した。

画面を確認しながら、安堵のため息を漏らす美王さん。「私が取材した記事が広報かわねほんちようになるなんて…」と感動を隠さなかった。

取材対象者との距離感や親身に話を聞く姿勢など、本職の広報担当者^と顔負けの仕事をやったのけた美王さん。次のような感想を述べた。

「まだまだ私は積極性が足りません。取材も記事も、上手にこなせなくて。卒業までに、いろんなスキルを磨いていきたいと思っています。もちろん緊張もしたけれど、それ以上に楽しくて。貴重な経験になりました。」

終了後、広報担当者^と握手を交わし、とびきりの笑顔を見せた。

まちの「物語」を残す仕事

本町出身の大学生がインターンシップ制度を活用して「一日広報担当者」に
いつも読んでいた広報かわねほんちようはどのようなように作られているのか、その一端を学んだ
取材を通して、「住民と広報の距離感」を肌で感じた様子だ



み お
中村美王さん(奥泉出身)
愛知学院大学文学部日本文学科3年

このまち
の物語
【番外編】